



# “源溪山だより”

https://chouanji.p-kit.com/ 令和8年1月④  
住職 恩田仁志 gen-chouanji@aka2.gmob.jp



八雲



亀齋

## ◆“小泉八雲”と島根のダヴィンチ“荒川亀齋”

小泉八雲が明治23年8月に松江に来て約1ヶ月後、寺町の龍昌寺にある石の地蔵に魅了され、すぐにその作者である荒川亀齋の元を訪ねています。

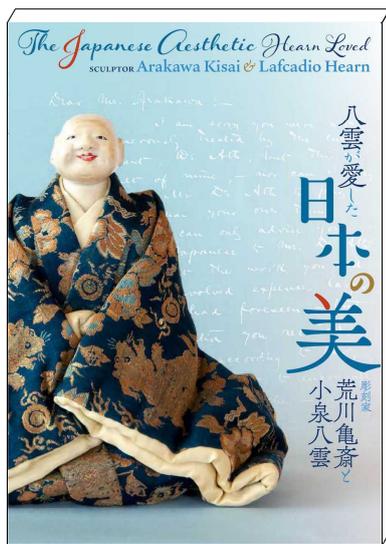
荒川亀齋の作品が当山にもあることは、昨年12月の寺報でお知らせしたとおりです。

八雲が松江にいたのは1年3ヶ月ほどですが、荒川亀齋の腕前と気質に惚れ込み、松江を離れてからも亀齋を支援し続けたそうです。

八雲は著書『知られぬ日本の面影』の中で、「私はしかし、この松江にも、現に生きている老芸術家で、左甚五郎以上に不思議な猫を作る人があると、ひそかに信じている。その一人に荒川重之助という人がある。」と述べて、亀齋を高く評価しています。

八雲は西田千太郎(朝ドラでは吉沢亮が演じる錦織友一)と共に、明治26年(1893)のシカゴ万博への出品を勧め取次に尽力。出品作は優等賞を獲得しました。

亀齋は明治39年に没しています。当山の本堂中央にある前机の裏面には、明治37年に彫ったとの字がたいへん力強く彫られています。



八雲と亀齋の名前が入った図書の表紙。2人の深い関係性が伝わるかと思います。



亀齋は文政10年(1827)、松江の横濱町の<sup>よこばま</sup>大工のもとに生まれます。名を重之助といい、66歳以降、亀齋という号を使っています。

木彫はもとより、工芸や書画だけでなく、国学や俳句、骨董にも造詣を發揮、更に物理学にも傾注、病院や島根県庁などの機械器具類の製作や管理、操作などを委嘱されるなど、その多才ぶりから、現在では「島根のダヴィンチ」とか「松江の平賀源内」などと評されています。

最近納品されたと間違えそうなほど、いまでも全くひずみや反りなどありません。

当山に残されたもう一つの作品である「鳳凰の欄間」については、後日紹介します。



前机裏面部分→